

(様式第3号)

平成20年度調査研究中間報告書

調査研究課題	増加する若年者の子宮頸癌とヒトパピローマウイルス (HPV) の感染実態に関する調査研究
計画期間	平成19年度～21年度 3年間
調査研究計画	<p>若年女性における HPV 感染の現状を明らかにし、子宮頸癌の増加との関連について検討する。</p> <ol style="list-style-type: none">共同研究機関で子宮頸癌検診を受けた 39 歳までの症例に対して high-risk 型 HPV 群の DNA の検出を試み、検出されたものについては遺伝子型別等の検査を行う。精密検査の結果、子宮頸部上皮内腫瘍 (CIN) 又は浸潤癌が認められ、かつ HPV-DNA が検出された症例については、病変部位の遺伝子解析等を行う。 <p>共同研究者 石渡 勇 石渡産婦人科病院長 西田正人 独立行政法人国立病院機構 霞ヶ浦医療センター院長</p>
進捗状況	1475 名の受診者(延べ 1531 名)についてハイブリッドキャプチャー (HC) 法により high-risk 型 HPV 群の DNA の定性検査を行い、検出されたものについては PCR 法により遺伝子型を調べた。また、遺伝子検査と子宮頸癌の精密検査 (組織診) の結果との関連について検討した。
これまでの成果の概要	<p>HPV-DNA の陽性率は、13.5% (199/1475 名) であった。年齢別陽性率は 20 歳代前半が 25% と最も高く、次いで 10 代後半、20 歳代後半、30 歳代前半、30 歳代後半と順次低下していった。</p> <p>HPV-DNA 陽性者の経過を追ったところ、約 70% の症例において持続感染が確認された。</p> <p>陽性例の遺伝子型で最も頻度の高かったのは 58 型 (15.6%) であり、次いで 52, 16, 51, 56 型の順であった。また、遺伝子型の混合感染例の比較的多いことがわかった。</p> <p>陽性者のうち子宮頸部上皮内腫瘍 (CIN) 又は浸潤癌であった者の割合は、18.3% (33/180 名) であった。CIN 以上の高度病変では 16 型が多く認められた。</p>
今後の計画・課題対応方法	<p>調査対象者を増やし、地域の HPV の感染状況をより正確に把握する。</p> <p>発癌には high-risk 型 HPV の持続感染が必須であるので、その状況について継続的に調査する。</p>